台大日本語文研究第 34 期
2017 年 12 月，頁 79-100
2017-09-30 收稿，2017-11-27 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.2017.34.79

金子光晴的南洋放浪體驗—以《馬來蘭印紀行》為探討中心

洪瑟君*

摘要

日本近代南洋文學的形成可追溯至明治、大正時期。在當時的南方熱潮之中，許多的作家前往南洋旅遊，寫下大量的南洋相關作品。然而，如同岡谷公二所言，除了以徵用作家的特殊身分隨軍前往南洋的作家之外，這些在當時前往南洋並撰寫南洋故事的文人們大多都只是「一時性」的停留在南洋，他們是否回到內地、或者又何時想回到內地完全取決於本人的意志。因此這些文人作家們，大多是以「旅人之眼」來看待並描繪他們眼中的南洋風物。

金子光晴也是日本近代與南洋相關的作家之一。然而，光晴的南洋體驗卻與一般的旅行者作家有所不同。他在南洋輾轉流離於當地在留日人經營的礦山、橡膠園等地賺取旅費，嚐盡放浪生活之苦。本稿將藉由分析金子光晴的《馬來蘭印紀行》等南洋相關作品，從另一種視點來探討日本近代的南洋文學。

關鍵詞：金子光晴、在留日人、流浪者、《馬來蘭印紀行》、詩

* 台灣大學日本語文學系助理教授

臺灣大學學術期刊資料庫

Mitsuharu Kaneko's Experience of Wandering the South Seas—Take *The Trip in Malaysia and Dutch East Indies* as the Core of Exploration—

Hung, Se-Chun*

Abstract

The formation of modern literature about the South Seas can be traced back to the Meiji Era and the Taisho Era. Under the Southern boom, many literary works related to the South Seas were written by writers who went to the South. However, as pointed out by Koji Okaya, except those who went to the South Seas as conscripted writers, most writers who went there and wrote stories related to the South Seas just stayed in the South temporarily. Whether they returned to Japan or when they decided to return depended on their personal wills. As such, those writers mostly saw the South Seas and described the Sothern scenery and figures in the eyes of travelers.

Mitsuharu Kaneko is also one of the writers related to the South Seas in the modern Japanese history. However, his experience in the South Seas is different from other writers'. Mitsuharu wandered across many places such as mines and rubber plantations managed by Japanese expatriates to earn travel expenses, and therefore suffered from his wandering life. This paper will analyze Mitsuharu Kaneko's works related to the South Seas, such as 'The Trip in Malaysia and Dutch East Indies', to explore the Southern literature in the modern Japanese history from another viewpoint.

* Assistant Professor, Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

臺灣大學學術期刊資料庫

Keywords: Mitsuharu Kaneko, Japanese expatriates, vagrant, *The Trip in Malaysia and Dutch East Indies*, poems

臺灣大學學術期刊資料庫

金子光晴の南洋放浪体験——『マレー蘭印紀行』を中心に

洪瑟君*

要旨

日本の南洋文学の生成は明治、大正時代に遡れる。南方ブームの中で、数多くの作家や文人たちは南洋へ向けて旅たち、南洋に関する作品を書いた。しかし、岡谷公二が『島の精神誌』の中で評しているように、戦時中徴用されて南洋へ派遣された徴用作家を別として、当時、南洋に旅立ち、そして南洋に関する作品を書いた作家や芸術家は大方「一時的」に南洋に滞在していたのである。彼らが内地に帰るか否か、また、いつ内地に帰るかは全て本人の意志によって決められたのである。言い換えれば、それらの作家たちは皆、興味本位で南洋に旅立ち、「旅人の立場」から、「旅人の目」を通して南洋の風物を観察したと言える。

金子光晴も日本近代において、南洋に関わった文学者の一人である。しかし、金子光晴の南洋体験は他の旅行者の作家たちのとやや異なっている。最終的には祖国へと帰ってゆかざるを得ないが、南洋の邦人社会に骨を埋めるような人生を選んだわけではなくても、光晴は南洋で必死に働いて旅費を稼ぎ、放浪生活の苦しみを味わいながら自分なりに南洋を体験したのである。本稿では、金子光晴が南洋放浪の体験に基づいて書いた作品『マレー蘭印紀行』を中心に、もう一つの視点で日本近代の南洋文学を探究したい。

キーワード：金子光晴、在留邦人、放浪者、『マレー蘭印紀行』、詩

* 台湾大学日本語文学科助理教授

臺灣大學學術期刊資料庫

金子光晴の南洋放浪体験――『マレー蘭印紀行』を中心に

洪瑟君

一、はじめに

日本の南洋文学の生成は明治、大正時代に遡れる。欧州航路によって洋行した文人たちは、船でヨーロッパに行く途中、南方の中継港シンガポールとペナンを経由した。南洋に滞在している短い間、彼らは好奇の目で熱帯風物を観察し、当地の生活状態を記録した。例えば、永井荷風の「新嘉坡の数時間」や島村抱月の「新嘉坡より」や三宅克己の「新嘉坡と彼南」など、枚挙に暇がないほど数多くの紀行文が残されている。昭和時代に入り、日本国内に盛んになった南方ブームに従って、中島敦や高見順のような南島に憧れた作家や文人が南洋へ向けて旅たち、南洋に関する作品を数多く書いた。

岡谷公二は、一般の日本人にとって、南洋（南島）が「治癒の場としての南島」と見做されていると主張している。彼は『島の精神誌』で、土方久功や中島敦などの日本近代において、南洋に関わった文学者を取り上げ、彼らにとっての南方が自らの「狼疾」を治癒するための場所にしか過ぎなかったと評し、日本の画家・文人の南方行は、ほとんどが「一過的」で、若き日の一挿話にとどまると論じている[1]。つまり、戦時中徴用されて南洋へ派遣された、いわゆる徴用作家を別として、当時、南洋に旅立ち、そして南洋に関する作品を書いた作家や芸術家は大方「一時的」に南洋に滞在していたと言える。彼らが内地に帰るか否か、また、いつ内地に帰るかは全て本人の意志によって決められたのである。言い換えれば、それらの作家たちは皆、興味本位で南洋に旅立ち、「旅人の立場」から、「旅人の目」を通して南洋の風物を観察したと言えよう。

金子光晴も日本近代において、南洋に関わった文学者の一人であ

[1] 岡谷公二「治癒の場としての南島」『島の精神誌』、思索社、1981 年、p.117－137。

臺灣大學學術期刊資料庫

る。しかし、金子光晴の南洋体験は前述した作家たちのとやや異なっている。周知のように、光晴は妻の三千代と夫婦の間にかなり切迫した状況があったため、三千代との外国旅行を思い立ち、昭和 3 年に二人でパリを目指して無謀な放浪の旅に出た。欧州航路によって洋行した人々と同じように、南洋は光晴にとって、旅の最終の目的地ではなく、あくまでもただの旅の途次の一時の碇泊地に他ならなかった。しかし、光晴は旅費を稼ぐために、南洋当地の日本人実業家のゴム園、鉱山などの所を転々として、在留邦人や当地住民の生活を身をもって経験した。途中下船にもかかわらず、光晴は却って他の南洋を旅の目的地とした文学者より長く南洋に滞在し、より深く南洋の風景を体験したと言えよう。西原大輔は金子光晴夫婦が「放浪や漂泊の思いは強くとも、最終的には祖国へと帰ってゆかざるを得ない存在」[2]だと論じている。しかし、南洋の邦人社会に骨を埋めるような人生を選んだわけではなくても、光晴は「短期滞在の在留邦人」のように南洋で必死に働いて金を稼ぎ、放浪生活の苦しみを味わいながら自分なりに南洋を体験したのである。昭和初期に南洋を彷徨った光晴はどのような視角で南洋の風景を見ていたのか。そして、彼の南洋に関わる作品において、南洋はどのように捉えられているのか。本稿では、金子光晴が南洋放浪の体験に基づいて書いた作品『マレー蘭印紀行』を中心に、もう一つの視点で日本近代の南洋文学を探究したい。

二、金子光晴の南洋放浪体験と関連作品

周知のように、光晴の南洋行の背景には、複雑な事情があった。昭和 3 年に生活苦に迫った光晴は現実から逃れるため上海へ逃避の旅に出たが、上海に渡航している間に妻の三千代は若い美術評論家の土方定一と恋に落ち、出奔していた。帰京した光晴は三千代を連れ帰って、経済的に不安定な生活と夫婦関係の破綻を重なった難局

[2] 西原大輔「日本人のシンガポール体験（30）――森三千代の小説『新嘉坡の宿』」『シンガポール』4 号、2006 年 12 月、p.19。

臺灣大學學術期刊資料庫

を打開するために、三千代に渡欧を提案した。そして、長男の乾を三千代の実家に預け、僅かばかりの旅費を持って、光晴と三千代はいつ帰れるとも分からない無謀の旅に出発した。昭和3年の10月に、二人は長崎から連絡船で上海に渡り、約二か月上海に滞在し、その後、上海から香港、シンガポール、ジャワ島を転々とした。昭和4年9月にスラバヤで開催された「東印度風景と風俗画展」を成功させ、光晴は一人分の旅費ができたため、11月に先に三千代をパリに旅立たせた。一方、光晴のほうは再び金策のために、マレー半島を北上し、シンガポール、ジョホール、バトパハ、マラッカ、スレンバン、クアラルンポール、イポー、タイピン、バタワース、ペナン島、スマトラ島メダンというルート[3]で、マレー半島を約一か月ほどかけて放浪した。邦人ゴム園や鉱山を回って、絵を売ったり、当地の新聞社に文章を書いたりして、辛うじて旅費を貯めてから、翌年の1月、光晴はやっとパリで三千代と合流することができる。二人がヨーロッパで約一年の放浪の旅を続けたが、昭和7年1月に、自活できないことから光晴は三千代をヨーロッパに残し、先に帰国の途に就いた。途中シンガポールで下船し、前回とほぼ同じコースで四か月ほどかけてマレー半島を訪問した。そのうち、5月に先に日本に到着した三千代から長男乾の病気の知らせを受け、急遽シンガポールから帰国し、前後三年半の放浪の旅を終えた。

この旅において、光晴が往路の五ヶ月（昭和4年6月から11月まで）と復路の四ヶ月（昭和7年2月から5月まで）、合計九ヶ月かけて南洋に滞在していた。「『こがね虫』時代の「文学的生命も栄養分も失い」、進む方向も自信も失った詩人は、マレー半島逍遥を通じて自分を取り戻した」[4]と評されるように、九ヶ月の南洋放浪体験は、詩人光晴に多大な影響を与えたことが窺えよう。自分が「文学のた

[3] 瀧本和成「金子光晴とマレー・ジャワ・スマトラ―『マレー蘭印紀行』を中心に―」芦谷信和・上田博・木村一信編『作家のアジア体験―近代日本文学の陰画』、世界思想社、1992年、p.120。

[4] 堤玄太「金子光晴のアジア―マレー半島での意識の転位を中心に―」『アジア遊学』50、2003年4月、p.155。

臺灣大學學術期刊資料庫

めに旅行したわけではない」というが、光晴は旅中に絶えずメモやノートを取り続けて異郷での見聞や感慨を書きためて、この南洋体験を数多くの詩や散文に結晶させたのである。光晴の南洋放浪の主な文学成果としては、ヨーロッパへの往路における詩集『女たちへのエレジー』の中の「南方詩集」と復路における詩集『鮫』[5]がある。また、昭和 3 年から 7 年までの放浪の記録は、自伝の三部作と称される作品『どくろ杯』『ねむれパリ』『西ひがし』として書き記されたが、マレー半島、インドネシアを彷徨った旅の体験は紀行文の『マレー蘭印紀行』として刊行された。他に、子供向けの童話『マライの健ちゃん』と翻訳『馬来』、『エムデン最期の日』は光晴の仕事の傍流と見做される著作であるが、いずれも南洋に関わる作品で、光晴の南洋体験を探求する際に看過できない作品と考えられる。

三、『マレー蘭印紀行』について

『マレー蘭印紀行』は金子光晴のほぼ三年半の異国放浪の途次におけるシンガポール、マレー半島、ジャワ、スマトラでの見聞をもとに、旅の途中、または帰国後書き継がれていったものである。全書は「センブロン河」、「バトパハ」、「ペンゲラン」、「スリメダン」、「コーラルンプル」、「シンガポール」、「爪哇」、「スマトラ」の八章で構成されており、昭和 15 年 10 月に光晴の代表的な詩集の一つの『鮫』（昭和 12 年出版）の後に上梓された。加茂弘郎は『マレー蘭印紀行』が『鮫』と同じ出版社から、長詩「鮫」の舞台である東南アジアの旅行記として、ほぼ連続する形で出版が計画、準備されている点に注目して、『マレー蘭印紀行』が『鮫』の散文版であり、両作品には同じ問題意識が見られると主張している[6]。

---

[5] 詩集『鮫』は詩「鮫」を核に、「おっとせい」「泡」「塀」「どぶ」「燈台」「紋」とで構成されている。原満三寿の考察によると、「鮫」以外の作品は、水脈としては南方体験にその源流を遡れるが、詩想そのものは、光晴が長い海外放浪を切り上げて帰国してから創作されたものである。（原満三寿「椰子と鮫のグラフティ」『金子光晴研究　こがね蟲』10 号、1996 年 3 月）

[6] 加茂弘郎「『マレー蘭印紀行』論」『こがね蟲』第 2 号、1988 年 3 月、pp.8－20。

臺灣大學學術期刊資料庫

作品全体の内容に対しては、記述は旅程の時間順ではなく、往路と復路を記載した内容が混在して、「紀行」として統合性に欠ける[7]と言われる一方、「因果関係や物語的連続性があまり感じられない断章が並んでいるかのように続く節や章が、実は互いに呼応する単語や表現によって相補的、交響的な関係にあり、意図的な言葉の配置が織りなすイメージの連鎖が全体をひとつのまとまりのあるものにしている」[8]という土屋忍の見解もある。また、詩人の手によるもの故に、「紀行文というにはあまりにも冴えざえとして、“美しい”としかいいようのない、鋭く、鞭のようにしなう言葉の群れ」[9]で織りなされ、川村湊に「近代の日本文学者による南洋体験の記録として、もっとも文学的に優れたもの」[10]であると称賛されている。

一方、沢木耕太郎は「『マレー蘭印紀行』には、『土地』はあるが『私』は存在しないのだ。とりわけその中心をなすマレー紀行には、ほとんど『眼』と『耳』と化し、ひたすら『土地』を映すことに専念しているかに見える金子光晴が存在するだけである」[11]と述べ、光晴の『マレー蘭印紀行』が同時代に出版された他の紀行文とは違った書き方がされていると指摘している。また、作品の中に言及された「苦力」、「土人」、「日本人の旦那」、「娘子軍」などの人々がいずれも、「非常な自然の下で、汚泥に染まりながらも、ゆるやかに流れる水のように、その生を送っている」[12]ため、木村一信は『マレー蘭印紀行』の冒頭にある「粘土色にふくらんだ水」のイメージはこの紀行文全篇を貫くものと見做せると主張している。確かに先行研究の指摘の通り、作品全体としては、光晴が「私」の視点から南洋の自然を描くことより、むしろ南洋の人間がどのようにこの南洋

---

7 金雪梅『金子光晴の詩法の変遷』、花書院、2011 年。原満三寿『評伝金子光晴』、北溟社、2001 年。
8 土屋忍「イデアの詩の形象―金子光晴『マレー蘭印紀行』論―」『南洋文学の生成　訪れることと想うこと』、新展社、平成 25 年、pp.142－143。
9 松本亮「解説」『マレー蘭印紀行』、中公文庫、1978 年、p.165。
10 川村湊『南洋・樺太の日本文学』、筑摩書房、1994 年、p.67。
11 原満三寿編『新潮日本文学アルバム 45　金子光晴』、新潮社、1994 年、p.99。
12 木村一信「流浪の旅の豊饒さ――金子光晴「マレー蘭印紀行」」『昭和作家の南洋行』、世界思想社、2004 年、p.234。

臺灣大學學術期刊資料庫

の土地で必死に生きていくかという姿を描くことを通して、当時の南洋風景を表現するのである。しかし、光晴はなぜこのような手法で自分なりの南洋を描いたのか、果たして光晴は完全な傍観者、つまり「私的」な感情を完全に込めずに南洋を描いているのであろうか。

（一）在留邦人の心境

南洋を彷徨っていた間、光晴は当地の在留邦人が経営しているゴム園、鉱山、旅館、商店を転々として旅費を稼いだため、多くの中下層の在留邦人と接触することができた。彼らの生活を近距離で観察することによって、光晴は作品において、長い文章で在留邦人の生活様態を描出したのである。第一章の「センブロン川」の中で、ゴム園を経営するために、南洋の厳しい自然環境の中で猛獣を撃ち、土匪を掃滅して、未開の地を開拓した在留邦人の苦労が描かれている。更に、苦力たちの同盟罷業、ゴムの相場の暴落、当地の排日運動などの描写を通して、当時ゴム園の経営難も反映されている。当初南方雄飛の夢を持ち、「南洋を日本の領土にする、その礎石にじぶんたちがなるつもりで乗込んできた連中」[13]と違い、

> いまの従業員は、(中略)内地のサラリーマンとおんなじです。テニスと麻雀、貯金帖と首の心配、そういったくらしですな。たゞ、ながく山のなかにいると、世間のことがわからなくなって、こゝにいるあいだはいゝが、おっぽり出されたらつぶしのきかない、困った人間ができあがるわけです。[14]

南洋で働いている在留邦人は、表面的には内地で働く人とあまり変わらない生活をしているが、実際には内地の生活と段々大きなずれが生じて、既に故郷の土地になじみ難くなったのである。光晴がそこで見たのは不況時代に、在留邦人の辛酸と未来に対する不安である。また、「ペンゲラン」において、当地のゴム園で働いている在留邦人と光晴との対話の場面は次のように描かれている。

---

[13] 「マレー蘭印紀行」『金子光晴全集　第 6 巻』、中央公論社、1976 年、p.26。
[14] 同前注。

臺灣大學學術期刊資料庫

> 日本から来る船が、このへんで始めてみる陸地は、此処だといって、感慨ぶかげに海をながめ、あなたが日本へかえられる舟も、多分こゝで、僕が見送っているかもしれませんよと、つけ加えた。[15]

話の中で、最初雄大な夢を抱いて異郷の南洋へ来た人々が現状に対してどうしようもできない無力感を表すと同時に、故郷を懐かしく思いながらも故国を遠ざかって既に帰られない寂しい心境をも語っている。在留邦人との直接の会話の場面においてだけではなく、彼らの寂しい心境が南洋の風景にも鮮明に映されている。

> 二年、三年、五年と、森林のなかに忘れられた人達は、時がたつに従って、おのれを支えていた故国の印象がうすれてゆき、記憶は脆くもかけちって、間隙が方方にできていった。そのすきまを充填しつつ､亀裂のようにしずかに成長してゆくものは、森林のはてしもしらぬ沈黙であった。[16]

豊饒な南洋の森において、光晴が感じたのは生き生きとした生命力ではなく、鬱蒼たる密林の静かさがもたらした恐怖感でもない。在留邦人の視点を通して、未来を予測できず、しかも故郷との繋がりが次第に切断されていく人々の哀愁しか覚えられないのである。

ゴム園で働く在留邦人の他に、光晴は『マレー蘭印紀行』において、幾度も娘子軍について言及する。「コーランプルの一夜」では、ホテルの女主人が娘子軍たちの悲しい境遇を語る場面が描かれている。娘子軍だった女主人が感慨深く女の悲しみを訴える舞台とされるコーランプルは、「馬来聯邦州の首府で、殷賑は半島第一の都」[17]である。そのようなコーランプルで､「わけても悲しいみせものの娼家」[18]が多くの立派な見世物の中に散在するのは格別に皮肉的な対比が呈されており、哀れな娘子軍たちの不運もより一層強く表現されている。また､「バトパハ」においても、光晴が当地に僅かに残さ

[15] 同注 13、p.53。
[16] 同注 13、p.19。
[17] 同注 13、p.64。
[18] 同注 13、p.65。

臺灣大學學術期刊資料庫

れている娘子軍に着目して、彼らの現状について、次のように語っている。

> 若い女の新たな入国を法令で禁じられているので、稼ぎのこっているものの、山の旦那たちも独身者が少くなり、国ちがいは不況で金がまわらず、そのうえ、じぶんたちも老に迫られいつまでそうしていられるものとも考えられない、そうした彼女たちのこころにも、からだにも、バトパパの街のふところを吹きぬける蠻気のような、冷々とした寂寞がひろがってゆくばかりであろう。
>
> 厠に入った。石壁のおれ釘に、反古があつめて糸で通して引っかけてあった。その一枚を引きちぎってみると、九星運占の本のくずれで、おそらく女達が、うかびあがる日を数えでもしたものか、二黒水性、説明の文字の下には、女たちや私をたゞよわせる波、女たちの顔の皺のようによろけた波のまにまに板子を抱いて、溺れかけて浮きつ、しずみつしている人間の図が画かれてあるのであった。[19]

熱帯の町に暮らしているにもかかわらず、娘子軍たちが感じたのは「冷々とした寂寞」であり、日に日に異郷で「溺れかけて浮きつ、しずみつしている」生活を送るしかできない。彼女たちは将来の生計を心配するが、消極的に「九星運占」で将来のことを予想する以外なす術がない。ここで注目したいのは光晴の描写である。絵に描かれた波のまにまに漂っている人々の中には、娘子軍たちのみならず、「私」も含まれているのである。光晴のその絵に対する解釈と想像には、当地の在留邦人の苦労をしみじみに痛感した光晴の姿が見えると同時に、当てもなく南洋各地を放浪している光晴自分の心境も反映されているのである。

（二）南洋風物に対する描写

「バトパハ」の一節の中で、光晴が熱帯における季節の交代を描いている。長年に熱帯気候の下に置かれた南洋では、季節の変わり

[19] 同注 13、pp.37－38。

臺灣大學學術期刊資料庫

目でも、自然景色の変換が温帯地域のような顕著な差異を示すはずがない。しかし、光晴による南洋の季節交代のシーンは、全く意表に出るほど蕭条たる雰囲気が溢れている。

> 熱帯地方のなかで、季節が零落をするのは十一月と十二月の頃おいだ。
>
> 繁茂したもののあいだで、いっさいのいのちがさびれかえる。生きに生き、延びに延びてしまった葉や茎の、ちからや、感情か、もうどこへも行きどころがみつからないように、大きく、はたとゆき止まっている。鉄分を含んだ丹い灼土の丘には、軍鶏が首をのばしたように椰子が乱聳し、丘のくぼみにはその実が落ちて、ころがって、髑髏場のような凄惨なけしきをつくっていた。そうした、荒廃した眺望の、起伏する丘丘が、炎天の下にどこまでもつゞいた。
>
> 毎日のくもり空、雷をふくんだ鬱陶しい天気模様。[20]

「髑髏場のような凄惨なけしき」、「荒廃した眺望」、「鬱陶しい」など、上記の引用文のように、光晴は作品において南洋の景色を描写する際に、マイナスのイメージを持つ言葉を大量に用いている。たとえ作品中に「明るみ」という言葉を使っても、「この世ならぬ悲調を帯びた明るみ」[21]で言い表す。また、雨の「騒音」のなかで、甲高い声で「悲鳴」を上げた木菟や、原始の奥からこぼれ出している「濁っている」川など、全体として光晴による南洋の自然は常に暗黒で憂鬱な色調を帯びている。そのような特徴は次の描写においてより一層明確に提示されている。

> 南方の天然は、なべて、ねこどりの眼のごとくまたゝきをしない。そして、その眼は、ひろがって、どこまでも、圧迫してくる。人を深淵に追い込んでくる。
>
> たとえ、明るくても、軽くても、ときには洗料のように色鮮や

[20] 同注 13、p.31。
[21] 同注 13、p.23。

臺灣大學學術期刊資料庫

かでも、それは嘘である。みんな、嘘である。[22]

南方の天然がたとえ色鮮やかと見えても全ては嘘である。他の作家による色彩豊かな南洋と異なり、光晴による南洋は、なぜか絶えず暗い性格を抱いているように見える。光晴は自ら『マレー蘭印紀行』の跋において、次のように書いている。

> 旅行記の方法は、自然を中心とし、自然の描写のなかに人事を織込むようにした。幸いに、熱帯地の陰暗な自然の寂寞な性格が読者諸君に迫ることができたら、この旅行記の意図がまず成功というべきである。[23]

『マレー蘭印紀行』の跋を通して、光晴が故意に南洋の陰暗面を読者に伝えようとする意図が窺える。当時、南洋を舞台として描かれた他の作品と違い、南洋をエキゾチックな雰囲気に囲まれ、明るくて色彩鮮明なユートピアと見做すという既成概念を一転させ、光晴は自分なりの南洋イメージを作り出したのである。そして、このような陰暗な南洋イメージは『マレー蘭印紀行』にだけではなく、数十年後に書かれた『ねむれ巴里』においても、同じように呈されている。「瘴癘蛮雨」の中で、光晴は南洋に対する回想について、次のように書いた。

> 南方の奥地は、ゴーギャンの絵などにあこがれて想像するような色彩の天国でも、豊穣な花園でもない。それは、過剰な生き物どもの生殖と、その息ぜわしさでしずまり返っている、どんよりとくらい、存在するものが悪意にみちた、大寂寥の世界であって、文字通り、百越から南は荒服の蛮界である。[24]

このような風物描写を通して、南洋という所は光晴にとって如何にも悪意に満ちている寂しい場所として見做されていたことが窺えよう。しかし、実際には、光晴が南洋に訪れた昭和 3 年に、マレー半島やシンガポールなどの所はさほど荒蕪の未開地とは考えられない。

---

[22] 同注 13、p.17。
[23] 同注 13、p.94。
[24] 「瘴癘蠻雨」『金子光晴全集 第 7 巻』中央公論社、1975 年、p.158

臺灣大學學術期刊資料庫

西原大輔の研究によると、明治時代から既に数多くの日本人の旅行者たちがシンガポールの植物園（1859 年に開園）やマレー人を中心とした東南アジアの民俗展示を行っていたラッフルズ博物館などを参観して、克明な記録を大量に残した[25]。それらの記録から、当時のシンガポールは必ずしも光晴に描かれたような荒服の蛮界ではなかったと推測できる。一方、日本人がマレー半島でのゴム生産事業に進出したのは専ら明治 44 年前後のゴム園ブーム以降のことであり、他国と比べれば比較的に遅れると言われるが、18 世紀の半ばから 19 世紀の初頭にオランダ、イギリスに植民地支配されてきたマレー半島では、主に経済的な搾取のため開拓されたと言っても、昭和初期に至っては既に相当的な規模の開発がされたに違いない。

矢野暢は『「南進」の系譜―日本の南洋史観』において、日本の南進論の概念が概ね三期に分けられると主張している。第一期は明治初頭の娘子軍の進出とそれに寄生するごくプリミディブな経済様式を中心として、「南進」というより、「南方関与」と称したほうが相応しい。その頃南洋へ行ったのは殆ど日本の下層民であり、活計を立てるために南洋へ出向いたのである。第二期の南進は明治三十年代末頃から始め、大正の初頭にピークに迎える。この時期の特徴といえば、経済的にはゴムやマニラ麻部門への進出が始まり、「トコ・ジュパン」という商業資本の形成も見られる。そして外務省の在外公館の開設が一通り終わり、在留邦人社会では、娘子軍などの下層階級が主流の地位から追われ、「グダン族」優位の時代になっている。第三期は昭和十年代の「大東亜共栄圏」の政策に従って、南方進出が国策となった時期に始まったと言える。第三期では、庶民の自然流出的な南方関与に代わって、国策としての南進政策が表に出てくるのである[26]。矢野氏の主張と対照すれば、光晴が南洋に滞在していた時期は、第二期の南進から間もなく第三期の南進に入る頃であり、零細な個人事業者のほかに、三井物産、三菱物産、日本郵船な

[25] 西原大輔『日本人のシンガポール体験』、人文書院、2017 年、pp.86－91。
[26] 矢野暢『「南進」の系譜―日本の南洋史観』、千倉書房、2009 年、pp.107－108。

臺灣大學學術期刊資料庫

ど、今に続く大企業の駐在員が南洋に住み、既に「グダン族」優位の時代になっていたと言える。当時「在留の日本人には、新旧両様の型がある」[27]という現状のもとに、光晴が作品の中で特に注目して長い文章で描写したのは、国辱と見做された哀れな娘子軍や三井、三菱のような大きな資本と競争できず、打撃を受けて、「我々の範囲が狭められて困ります。これは一つ考えてもらいたい」[28]と悩み苦しんでおり、助けを求めようとする個人商店の人達の姿である。まるで雨の日に、高い枝に蹲って「この世にそれよりほかのたよるものがないかとばかり、あわれにきこえてくる」[29]力ない鳴き声を出して、ともを呼び交わそうとする猿のように、それらの人間たちの無力且つ哀れな姿を南洋の蕭条たる風景と重ね合わせ、光晴の自分なりの南洋像を織り出しているのである。

勿論その時期に、南洋において日本領事館が既に開設され、当地の在留邦人に国の支援を行っている。しかし、総領事や領事と密接不可分に結びつく存在と言えたのは、当時エリートとして権威性を持っていた「グダン族」であり、他の「下町族」にとっては、総領事や領事は口を聞く機会さえない、いわば雲の上の存在であった[30]。光晴は『マレー蘭印紀行』において、常に日本の公権力に恵まれていない下層民のほうに関心を寄せている。このような「選択の眼」を用いて南洋の風物を描く理由は容易に想像できる。南洋で転々とした期間中、主に中下層の在留邦人と接触していたのがその一因であり、当初無一文で日本を脱出して異郷で彷徨った自分がそれらの人達に共鳴を感じ得たのが最も大事な要因であると言えよう。光晴が着眼した南洋風物は主に自分の心象風景を反映するものであり、作品に呈される南洋の陰暗で憂鬱なイメージも個人体験からなる自分なりの南洋像であると考えられる。

[27] 同注 13、p.87。
[28] 同注 13、p.88。
[29] 同注 13、pp.38－39。
[30] 同注 26 前掲書、p.93。

臺灣大學學術期刊資料庫

四、南洋作品における反植民地主義の言説

第三節にも触れたように、「南方詩集」も『鮫』も『マレー蘭印紀行』と同じく光晴の南洋放浪体験に基づいて書かれた作品である。特に『マレー蘭印紀行』は詩集『鮫』とほぼ同じ時期に書かれ、本来同じ時期に出版される予定であった。その上両作品に同じ問題意識が見られるため、『マレー蘭印紀行』が詩集『鮫』の散文版と言われている[31]。

昭和 3 年から 7 年、さらに『マレー蘭印紀行』が上梓された昭和 15 年へと続く時代に、南洋は既に西欧諸国による苛酷な植民地支配の暴力に喘ぐこと久しい。一方、日本では昭和 10 年代に国策としての「南進」が取り上げられて以来、国内の政治的な事情が大きく変わり、「大東亜共栄圏」というスローガンの登場に従い、日本の軍国主義の眼が南洋へ伸びていた。内閣情報委員会の拡大に従い、言論統制がさらに強化された状況の下に、詩集『鮫』は昭和 12 年に出版された一方、『マレー蘭印紀行』の刊行は予定より三年遅れて 15 年の 10 月にようやく叶えたのである。

「鮫は、馬拉加や、タンジョン・プリオクの白い防波堤のそとにあつまつてゐる」、「――吾等は、基督教徒と香料を求めてここに至る。／ヴスコ・ダ・ガマの印度上陸のこの言葉は、／――吾等は、奴隷と略奪品を求めてここに至る。／と、するもよし。」[32]、昭和 10 年に発表された長詩「鮫」の内容によって光晴の西洋に対する植民地主義・帝国主義への反感が容易に読み取られる。一方、『マレー蘭印紀行』においても、植民地支配の下で貧しい生活を暮らしている「苦力」や「土人」の悲惨な姿に視線を向ける描写が多く見られ、「爪哇はもはや、骨も、皮も残ってはいない。馬来半島は、毒の注射をうけて、全身が痺れてしまっている。そして、こゝ、スマトラはいま、俎のうえにのせられた」[33]という南洋の惨めな現状が描か

[31] 同注 6。
[32] 「鮫」『金子光晴全集　第二巻』、中央公論社、1975 年、pp.37－57。
[33] 同注 13、p.93。

臺灣大學學術期刊資料庫

れている。横暴に南洋の資源を搾取した西欧の植民地支配は「ごろりごろりとしながら、人間の御馳走をいくらでも待っている」[34]鮫のように、光晴の反感を買ったのである。南洋での植民地支配に対する批判という点において、『マレー蘭印紀行』と長詩「鮫」のモチーフは一致していると言えよう。

しかし、光晴の作品における反植民主義の言説を表面的に読み取るわけにはいかない。『マレー蘭印紀行』を出版する際に、光晴が跋において、次のように書いている。

> この旅行記は、もっと早く出版したかったのだが、都合が悪くて今日まで延びてしまったので、少々今日の事情とは変わったところが出来、一部を書き直さなければならなくなった。[35]

加茂弘郎は『マレー蘭印紀行』（昭和 15 年 10 月 25 日に、山雅房出版）の各章の本文を単行本に収められるまでに当時各種の雑誌に発表された初出の文章と照合してみたところ、『マレー蘭印紀行』には「それぞれ細部にわたる推敲の他、かなりの削除や添加所」[36]が見られ、「書き直しを含め、むしろ実際は、相当の部分が帰国後に肉付けされ、書き上げられたと見るべきである」[37]と主張している。出版の時代背景を考えれば、光晴が言った「一部を書直さなければならなくなった」というのは、言うまでもなく「今日の事情」という当時の国全体の政策の下で、「侵略国家」など当局を刺激した言葉や描写を削除し、または国策に従い、意図的に戦争協力に関する描写を書き加えたことだと考えられる。

また、光晴は戦後に発表した「詩人」において、詩集『鮫』について次のように述べている。

> 『鮫』は、禁制の書だったが、厚く偽装をこらしているので、ちょっとみては、検閲官にもわからなかった。鍵を一つ与えれば、どの曳出しもすらすらあいて、内容がみんなわかってしま

[34] 同注 32。
[35] 同注 13。
[36] 同注 6。
[37] 同注 6。

臺灣大學學術期刊資料庫

うのだが、幸い、そんな面倒な鍵さがしをする閑人が当局にはいなかったとみえる。なにしろ、国家は非常時だったのだ。わかったら、目もあてられない。「泡」は日本軍の暴状の曝露、「天使」は徴兵制度の否定と、厭戦論であり、「紋」は日本人の封建的性格の解剖であって、政府側から見れば、こんなものを書く僕は抹殺し価する人間であるわけだ。[38]

光晴の話によれば、戦時下の文学における西洋の植民地支配に対する批判の言説が作家の本心を表せるか否かは疑わざるを得ないようになったのである。少なくとも光晴自身の場合、詩という文体の持つ抽象性を利用して隠蔽の手段を使い、作品を国策に協力した文章のように見せかける工夫をしたのである。『マレー蘭印紀行』は散文であり、詩のように読者が自分の想像によって自由に解釈し得る言葉や表現を多用するわけにはいかない。しかし、『マレー蘭印紀行』において、南洋を蚕食鯨呑した西洋の植民地主義を痛烈に批判する光晴の思いが示されていると同時に、行間を読んでいくうちに日本の経済侵略に対する光晴の反発も微かに匂うことができる。国の支援を受けた「グダン族」を中心に営まれるゴム事業を言及する際に、光晴はゴムの苗木が植えるため原始の森を火で焼いて開墾するという人間の無限の富に対する非望を嘆く。一方、国にサポートされない個人事業者などの「下町族」に対して、光晴は彼らの無力と悲哀に深く共感を覚える。また、作品において支那苦力たちの同盟罷業や排日騒ぎなど、随所に描かれている華僑の日本人に対する厳しいまなざしの背後には、光晴が放浪の旅に出た昭和 3 年から『マレー蘭印紀行』が刊行された 15 年までの間に起こった満州事変（昭和 6 年）、上海事変（昭和 7 年）、日華事変（昭和 12 年）によって徐々に悪化していった日中関係、更に日本の軍国主義による暴虐の侵略戦争を想起せざるを得ない[39]。このような描写を通して、南洋で行わ

[38] 「詩人」、同注 13 前掲書、p.192。

[39] 柴谷篤弘は戦後出版された『金子光晴全集』における詩「泡」を考察し、当時詩の中で「日本人のことを時おり中国人の立場から『リーベン』と表現している」のは「『抗日・反日・排日・侮日』の気分を高めて来ていた華僑・

臺灣大學學術期刊論文集

れた日本の経済侵略や当時の日本の軍国主義に不満を抱く光晴の思いも窺えるのである。当初追われたように日本から抜け出して当てもなく世界を放浪した光晴は、西欧への憧憬でも日本回帰でもなく、何処にも属されていない惆悵を感じたのであろう。「南方詩集」の中に、南洋で見たヨーロッパ人とアジア人との混血児の悲しさ、寂しさ、頼りなさを描く詩が「牛乳入珈琲に献ぐ」「混血論序詩」「孑孑の唄」の三篇ある。いずれも西洋にも東南アジアにも属されてない混血児の心境を共有する立場に身を置いて書いた詩である。自分と同じように何処への帰属意識も持たぬ混血児たちに共鳴を感じた故に、光晴が詩集の冒頭に、「この詩集を東南亜細亜民族混血児の諸君にささげる」という献詞を掲げたのであろう。「文明の一漂流物」として、「文明のない、寂しい明るさ」に満ちている南洋で「かへらないことが／最善だよ。」[40]という放浪の哲学を実践した光晴は、西洋（ヨーロッパ）―東洋（日本）に対置されるもう一つの極としての南洋を発見した。そして南洋を異郷としてであると同時に郷愁として捉える感情も放浪者の光晴の心に湧いてくるのであろう。

五、結び

一般の旅人作家と違い、南洋各地を彷徨って旅費を稼ぎ、当地の在留邦人の所を転々とした光晴は、自身の境遇によって南洋当地の中下層の労働者や在留邦人と付き合うことが多く、自然に彼らと同じ視角で南洋を見る。そのような視点を通して成された『マレー蘭印紀行』には、言うまでもなく在留邦人たちが蛮荒な南洋で一生懸命に生計を立てる辛さと人間が無情の自然環境において自然と必死に戦う情景が多く現れている。それと関連して、当てもなく彷徨っ

中国人の立場で、光晴が日本を見ていたことを示唆している」と指摘している。（柴谷篤弘「『表現の隠蔽』と『隠蔽の表現』」、木村一信編『戦時下の文学　拡大する戦争空間』、インパクト出版、2002 年、pp.305－306。）

40 「ニッパ椰子の唄」の一節である。文明のない、さびしい明るさが／文明の一漂流物、私をながめる。／胡椒や、ゴムの／プランター達をながめるやうに。／「かへらないことが／最善だよ。」／それは放浪の哲学。（「南方詩集」、同注 32 前掲書、p.273。）

臺灣大學學術期刊資料庫

た寂しい放浪生活の中で、光晴が描いた南洋風景はまさに光晴自身の心象風景を反映しているように、陰暗で憂鬱なイメージが呈されているのである。また、同じく南洋放浪の体験に基づいて書かれた詩と対照して読めば、当時日本国内の厳しい政治体制の下に、作家がやむを得ず隠蔽の手段を使って文章を書く苦心が窺える。当時のような文壇の現状におかれて出版された『マレー蘭印紀行』には、たとえ光晴が故意に陰暗且つ憂鬱なイメージを作ろうとしても想像し得ることと言えよう。

一般の旅行者は、常に好奇心と未知に対する期待を抱いて旅立った。それ故、当時南洋に旅立った作家たちの大方は内地と完全に異なる南洋の民俗や習慣などに興味を持ち、そして作品の中で彼らが見た新奇な南洋風物を描いた。それに対し、光晴は南洋当地の複雑な人種に注目し、彼らが営む店舗や住居について多少でも描写したが、「旅行記」と称された『マレー蘭印紀行』には、他の旅人作家のような、当地の民俗風情を深く理解しようとする意欲が見られない。金子光晴は旅人であると同時に、放浪者であった。放浪者としての光晴は南洋の中下層の人々の心境を共有する位置に身を置いて、彼等の視点を通して南洋を見詰めていた。その一方、彼は自分の身を南洋の中下層の人々に投影して、自分の視点で南洋を見詰めていたとも言えよう。このようにして、光晴は『マレー蘭印紀行』において自分なりの南洋像を作り出したのである。南洋の放浪体験は光晴にとって、南洋当地の人々の視点を通して南洋を見詰めた旅であり、南洋の人々の視点を通して自己を凝視した旅とも言えよう。

【付記】本稿は科技部の研究助成（助成番号 NSC 104-2410-H-002-132)による研究成果の一部である。なお、論文掲載にあたり、査読者の先生方に貴重なご意見を賜り、深く御礼申し上げます。

臺灣大學學術期刊資料庫

【テクスト】

『金子光晴全集』第 2 巻、中央公論社、1975 年
『金子光晴全集』第 6 巻、中央公論社、1976 年
『金子光晴全集』第 7 巻、中央公論社、1975 年

【参考文献】

松本亮（1978）「解説」『マレー蘭印紀行』、中公文庫
岡谷公二著(1981)「治癒の場としての南島」『島の精神誌』、思索社
加茂弘郎著（1988）「『マレー蘭印紀行』論」『こがね蟲』第 2 号
瀧本和成著（1992）「金子光晴とマレー・ジャワ・スマトラ―『マレー蘭印紀行』を中心に―」芦谷信和・上田博・木村一信編『作家のアジア体験―近代日本文学の陰画』、世界思想社
川村湊著（1994）『南洋・樺太の日本文学』、筑摩書房
原満三寿編(1994)『新潮日本文学アルバム 45　金子光晴』、新潮社
原満三寿著(1996)「椰子と鮫のグラフティ」『金子光晴研究　こがね蟲』10 号
原満三寿著（2001）『評伝金子光晴』、北溟社
柴谷篤弘著（2002）「『表現の隠蔽』と『隠蔽の表現』」木村一信編『戦時下の文学――拡大する戦争空間』、インパクト出版会、2002 年
堤玄太著（2003）「金子光晴のアジア―マレー半島での意識の転位を中心に―」『アジア遊学』50
木村一信著(2004)「流浪の旅の豊饒さ――金子光晴「マレー蘭印紀行」」『昭和作家の南洋行』、世界思想社
西原大輔著（2006）「日本人のシンガポール体験（30）――森三千代の小説『新嘉坡の宿』」『シンガポール』4 号
矢野暢著（2009）『「南進」の系譜―日本の南洋史観』、千倉書房
金雪梅著（2011）『金子光晴の詩法の変遷』、花書院
土屋忍著（2013）「イデアの詩の形象―金子光晴『マレー蘭印紀行』論―」『南洋文学の生成　訪れることと想うこと』、新展社
西原大輔著（2017）『日本人のシンガポール体験』、人文書院

臺灣大學學術期刊資料庫